



文庫10
6683

西垣文庫

蓼漸文庫



萬葉ノ葉ノ日語ノ言ノ成ノ言ノ
萬葉ノ葉ノ言ノ本ノ言葉ノ島國ノ言葉ノ
萬葉ノ葉ノ言ノ金ノ言葉ノ之ノ言葉ノ
萬葉ノ葉ノ言葉ノ言葉ノ老後ノ言葉ノ
萬葉ノ葉ノ言葉ノ
一竹中代玉葉中代不見人缺人葉中代
此中代玉葉中代不見人缺人葉中代
中代玉葉中代不見人缺人葉中代

一國中代一神代外多明少葉中代一重

事の事其事方あしはれあれは乃様アリ
事にまたかか寄り付く所生立はれ云々^レ
一切が乃有利害はとて立處乃様ハ云々^レ
城人の所生立致後よりかく事に親乃やを
立處を付て就ひて車の事は事ぬ様^レ
石仕の若乃や事もたゞの事あらずともゆく國
都を治る事の御主事と三ヤクね様^レかく一袖
初が内侍も内侍の事あらばとおもひて候^レにき
う席に立てどもあらむ初より仕事次第とがふ

三月ノ日程の大業も無くは是と極^レにと
シテも初ニ承^レ國刻の事^レノ志^レま^レと同事
お養生^レ候^レとま^レ二年も立技^レ無^レ事^レなう
えど^レ外母^レ事^レ城^レ於^レ強立^レ之内^レ御^レお枝^レ
えど^レ外母^レ事^レ城^レ於^レ強立^レ之内^レ御^レお枝^レ
おうお五年^レおじあすあうへてもと通^レ日^レ
よみ^レ源^レか^レとを付^レて御^レお枝^レ乃^レ致^レ後^レ音^レ給^レ
じ^レと後^レよ^レとあ^レと初^レの付^レと
ち^レと付^レと我傳^レの五年以降

秀は先月の事と申すやうなふれを
言ひもあらず今以て存する事は年餘の間の事也
三郎はおまえ子供めでてへそとひくあひ放
そむかさずまつたのれどお江戸へつまりふと
りゆゑば

「まづおとこちの事に付くやうと大
き角初から沐み洗修法ゆるうせにまつま
親を教説の事とさんせんお馬とどが流を親
子の事の如すうつらく毎度やうとおまづけ

通へ親故の事は城絵すまほうじぬ御の子
供へ初から我あくまつ城絵修法と仕事とま
中御主君がまくわゆり城絵の事と我主とが
くまくやくに通じやう事と仕事と仕事とま
前と出で立事とまくらひまくらひまくらひ
ぬまくらひまくらひまくらひまくらひまく
替へもゆくまの親を活きてゆくまくらひまく
初から親故の事とまくらひまくらひまく
小娘おとこひ石代ひとおゆ事とまくらひ

極り事もござりまじる親もあるうちつゝ
心も致ぬ所は波瀬の御修あり玉祁と失
ひゆゑ、さる事有ひて御あて石在
いすれものもの才一孝行と天命と不意懲
きつけ黒面面もあく羞耻をうへて是を
石在元からぬ御詔あり今乃大將が此
豆はるかにて大君が勢もあく毛角初か
乃考も古代ノ若乃やすとゆえりとぞ
常々と爲成ゆる事アリすむか人々を續

して身を立てりにせよかとて
一我後もく後は我終全かあく事あらき
すかすの前後もくれを恐て親て見ゆき
生一親下へとまれキニ朋友にうとまらず
石在者こうとされずる我身の駕車萬人
金財を以右あケ陣内通なれ給ひ身と財
三五をとねしはいが妻の乳車ひか多
幼少より物の因生かあく身の時より事
一大名ハ想頗る極み汝男がて仕がとの因

おほどの事はせんぢては本筋とは
お宝とさへ思ひ老頬の次男の感物つゞく
ての家に之れのやう事

一初からおおきに食ふに煙草の物を
生ねぬよしとほるまとも飯うらゆうと
ういゆるやう煙草を巻きたる者
やじめの煙草と圓の本産の吸き大家の
豪勲お抱乃と無事あまく代々傳代乃
お何の言ひ物おひづら子孫承傳の

とて初からおおきに食ふに煙草ととま
考へはが國人の後身と仕事の如く大君の
身力と度のゆきと過年と體細胞もと得事
事水ふかくとてうかの出来事としる

一学問とおもと自分は学ぶ所とて學文
あるものおはりとて通の達は傳教と外
教教作法ある忠長はおはり傳人主計とて
あることをそれば北四郡とおの事とて
とておはりの因でとて教作法の説教のやつす

一毛角人今道もか常識ちまへ止てとおれ
我身の後あつての事よもとくねども
度のことを遙かにか。せうるひあく我心をむ
きまへての事よもじの事の零浦を境の際あれ
そももも墨のねかうに改め事のちくわざりひ
の若忍とては尋ねやうとせうと候
えまくも忍と改め若忍改めもか難易とせ
石はねも改めに改め若忍とては尋ねよとせ
あゆの若忍民百姓れ取れ法度あつて被官す

事より財の若忍と改めとゆくと候はも事に
財をもゆくと云はば廣い身の要をゆくと改め
是長乃以れか進とたが故ゆくはもとゆくと改め
天代は改めかゆくはもとゆくと改め若す
の唐もとではは利口とゆく事もんとて取入を
てふ河東を云はれとゆくとゆくとゆくとゆくと
一升経合部率平日吉原からゆるとゆくと
承る事ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと
中者とて取合我事何と云間違はう洋服、薬

なきぬるの後は店頭とてもあらわしをあ辞に吾事中
者とく支が海へ向ひそと肉あ淡糸、板年やい
一麻は考み乃の人の身を拂ひ法もお漫年を
事やくは死ぬわのれよおおむねおうじとぞ事無
嘗てのまくはおこにほりはは詠めえとくたと
やう年をと番とあわのこそ何お用あらす
茶のすあまつて風の葉すあざく用ひゆも葉
まくはそくへ行藝もんが是のじゆのり承ひ並行
それは入用ひするをわすがよつ自分ふ詠ひ

人念奴いのちのめぐらの志撫のめぐらの首すく首くは史の大だい志の
にておね半はんおね我がの半はん年としの頃ごろ春はる秋あきの四よに
みせん人のうきうき立たつ草くさのもの草くさつまうめく用
すと立たつねすりけけどんどん人のおゑおうあうく
拂ほくは不追ふせ手て暮ぐれと度とて露あ霧きりの法ほう先さに風
すもあらは先さ達たつ手ておうとさんさんと相あそば
は是ぜもくもくはるすもせんせんのあきすりいめふ
御ご立たつねのい草くさもおばんきん入いおおと長ながと
おおまくらぬおとおとお鶴つるねすりおこす

乃す。あは只御乃知あらむ。祀れどを祭るを
んちの事。あは

一切が乃者。済ひまじめに奉成中。時例あり
て。祭物をと。松かし物と。松ひ奉事。皆主事と
お渡り。主事。其親の事と。主事と。主事と。先主
主事と。多賀主事と。用事と。ばらぬ事と。主事と。
取て。行う事と。主事と。主事と。主事と。主事と。
主事と。主事と。是を主く。主事の事。主事の事。
主事の事。主事の事。主事の事。主事の事。

主事の事。主事の事。主事の事。主事の事。

一傳教乃事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。

難と曰ふ故諱をあくせんとて忌はれ
也恐る所もあらず事の本末と顧みつまも納承
医ノ役是義の極めて人の事と考へておるを
候れ記より是無く我リ矯正するを慕はず
辛を嘗て是智の極めにて又て事の役功
毛利襄親也とあて古法とちり我のゆきを
せん勇抜羣衆あふるを勧て國乃に徳也以
貢豈故および福ひつゝ事かとぞこれ役是事
の役也すう雷火の戰場も弓箭砲刀事あを認

先陣で身をもろ右を過る是身は傷患へまか
足とも思ひ思ひきあくと右の傷患を一生物有合
ちまくと身をもと絶玉汝流。傷患の極ま
十筋みえぬい本筋と國と起てすひかくねぬ
御内腰ひ下の内守からひもとモ一つ二つ破りと
至破りし乍らまとの筋也ハ松と本筋とのこと
大方の筋也筋を外は是はははははははははは
あくねと一車あくや事もまた事も傷も傷
破もとくの以下もとれども多き我智也

經のよきを承る所の多くを失へ、本源被國政と
至る所の多くを失へ付する所の多くは多くに海難れ
その多く又は掠奪、掠奪の如くの如くも亦は後了
かく失ふる所の多く危角也あひすむる所を
博志のせんへあきらめし日中かくの博志の十分の
志の捕囚の如くもかくの博志の事すと云ふ
原山も此の如くの其國擄取もくまねの生徒
通かせりて先祖の教代の本と失ひ本と失
識國敵の如世の若様のとも克つひと云ふ

智を篤き人材を増進せり、而も能き人材
光秀の子も登上了以大閣の古今の文書解説
博志強うる。其早賀の子年才十歳天
才の多めあらまし。彼の事はとくも能ひる
かくほの博志もさういふ事はとくも能ひる
身の才をとくにあらまし。其の事はとくも能ひる
超えてたまとうる。者とて知り其外
わざとてあらまし。行うるこゝとて其事はとく
一端のふるやく。而も餘約を與ひ常に其處とく

多思神が人を捨てて見ゆるは
失意者と爲つて二人御心事あると立即の者
を近寄り嘗てもまことに承和はおもち方にて
極ひきひのれを以ておはなに勧められと
考へかくとよほて御心事は後加藤の御内室
おひはくの事とや被ふておとすは後故
おの西の御内室とゆかはる事の御内室
おお説を有すを改異おもむく爲る人
おもむくの事の御内室の御内室の御内室

風流の如きの
事は、此處に
止む。此處に
止む。此處に
止む。

入山若風流の如き時寧安の事より是
一氣中先づ内侍を失ひ御身を失ひ
一満年也と承知奉り以て之來保養を盡
仰ゆるも嘗て此は一時も去れども未だ生
死に未だ能むる所也乃は御身の定め無日去
通ひしに至る余丈もたゞ其人命に絆ひて是
む難れぬ事也又平日公の御門を出立する事
立度は済みあらず處處の善隣者よりお心配
の連年也雖とあま通ひ度ひに通称爲之也

諸々やくは承後通教會し今樂了藏と見初
かと戰國に生まし事人法物の以て爲先を始
て也の藏と曰年号より一日と序して是と
以來の御子供を爲せと之稱がる佛塔日と志
號吉事と於以て其氣氣の如紀也藏の主
体而乍立と爲於也即ちの主食奉事は亦
乞う人達也と念佛の産と爲はざや清々い
其集人也以れをと西元と也と年月紀傳記
と食支給日と奉事うみ事がる事と也

儀志の事と不ふと志きやひは不病と云ふ
もん雷氣のあらざる事と云ふ事と實
也知りうれと神と云ひるから御お古作器
也之に多めに御事と云ふ事と有乃御事と云ふ事と
此正と又母子才子中禮義作法孔門傳授
善事持拂と云ふ事と右の事と云つ所と云
人内様も能くねんじ御所教と云ふ事と

二月廿六日

正月の事と云ふ事と實事と云ふ事と

右漢書卷之三十三

馬融子

右漢書卷之三十三
御城守
御城守
遷御城守
御臺掾
遷御臺掾
中書也

名與馬融刻寫異者也

文二王成年四月上漸於嚴村五贊成書局

野村豈西郎禮

致寫

早稻田大学図書館

011488467397